

高齢者たちの映画づくり

田んぼdeミュージカル委員会（むかわ町穂別）

深い朝霧に包まれた「穂別地球体験館」（むかわ町穂別）の「アースギャラリー」に、高齢の町民たちが元気な足取りで次々とやってきた。

2010年秋の週末。ここは、観光客の休憩場所。広々とした内部に西部劇の酒場セットが設けられていた。お年寄りたちは奥の小部屋でガンマンや「西部の女」の衣装に着替え、ドーラン化粧を施して酒場セットに移動、出番を待つ。

「田んぼdeミュージカル委員会」（原田幸一代表）が自主制作するウエスタン仕立ての映画「赤い夕陽のジュリー」の撮影現場。すでに第一作「田んぼ de ミュージカル」、第2作「田んぼ de ファッションショー」、第3作「いい爺いライダー」のミュージカル作品を製作しており、今回の「赤い夕陽のジュリー」は4作目となる。

■ 平均年齢 78 歳

出演者や主要スタッフの平均年齢が78歳。最高年齢者は90歳で、比較的「若手」の脚本担当で事務局を預かる斎藤征義さんにしても67歳だ。原田代表は84歳、伊藤好一

監督が81歳という、年輩者中心の驚異的な映画づくりなのである。

委員会の常任メンバーは10人。支援してくれるギャラリー会員が年を追って増え、いま70人。お年寄りから10代、20代の若者、学生まで、職業もまちまちだ。

折につけ、ほぼ毎週月曜の夜7時頃に「アースギャラリー」などに集まってはワイワイ、ガヤガヤ。撮影の日程は勤め人も参加しやすい週末に設定している。

映画作りのきっかけは、2001年にさかのぼる。穂別町（当時）主催の文化講演会に講師として招かれた崔洋一映画監督が「映画づくりはひとづくり」と題して、支笏湖小の子どもたちが卒業記念につくったビデオ映画を紹介した。

「おれたち年寄りにも映画が撮れるべか」。講演会終了後の懇親会で問いかけられて、崔監督は「できる、できる。大丈夫。本気でやるなら協力する」と応じた。「やってみっか」「いっそ、ミュージカルはどうだ」。

元電気店経営の原田さんらが翌年、役場職員（当時）で作家・宮沢賢治研究で知られ

る詩人の斎藤さんらと「田んぼ de ミュージカル委員会」を発足させた。

第一作は、町が町政 40 周年記念事業として全面支援して取り組んでくれることになった。北海道文化財団などからの助成もあって、約 280 万円の費用を何とか確保できた。

町民の 4 分の 1 ほどが 65 歳以上のマチで、高齢者たちによるビデオ映画づくりがスタートした。その年のうちに撮影に入っ、翌 2003 年には完成試写会にこぎつけた。

崔監督は 20 回も撮影現場に立ち合い、熱心にプロの技を伝授してくれた。「崔さんは手弁当でやってくれて。せめてものお礼に地場産の長イモやお米などを差し上げています」とスタッフたち。

斎藤さん執筆のストーリーは、農家の青年源次郎の出征、復員から始まる。源次郎は出征前に見合いした千代と結婚する。式を挙げる余裕はなかった。夫妻は冷害や洪水と闘いながら稲作に励む。

やがて減反政策からメロン栽培に転換を余儀なくされる。懸命に生きてきた夫妻も、いまや年老いた。周囲が「式を挙げさせよう」と動き出す…

当時、源次郎役の梅藤和男さんが 69 歳、千代役の棚橋幸子さんが 68 歳。出演・制作関係者は 125 人、平均年齢は 74 歳だった。

■ 苦闘の歴史を再現

抱腹絶倒のミュージカル映画に仕立てたが、物語の骨格には穂別のマチが歩んだ苦闘の歴史がある。穂別にはかつて、産出量国内一のクローム鉱山や炭鉱があり、林業でも栄えた。それらの輸送に、国鉄路線もあった。盛んだった造材の仕事歌が「田んぼ de ミュージカル」に再現されている。

稲作とメロン、野菜の農業のマチに変身したが、昭和 30 年代に 1 万人を超えていた人口は約 3600 人に減った。2006 年には鷗川町と合併「むかわ町穂別」となった。

第 1 作の製作過程がNHKなどマスメディアで紹介された。作品が発表されると、地方の時代映像祭コンクール・市民自治体部門奨励賞などを受賞した。「米作、メロンと恐竜の化石」のマチが一躍、脚光を浴びた。



最新作「赤い夕陽のジュリー」撮影現場の酒場のセットで打ち合わせする出演者、製作スタッフ。中央、眼鏡の男性が、全面協力の崔洋一映画監督。右端は脚本担当の斎藤征義さん

■ はつらつ高齢者に

映画製作にかかわった高齢者らがはつらつとしてきた。「背すじが伸び、身だしなみがオシャレになって、何よりも若返った」と、マチのだれもが口にするようになった。マチ全体が活性化して輝いてきた。

受賞の賞金や町費補助数十万円、北海道文化財団の助成なども得て、制作費約 300 万円を調達して、第 2 作「田んぼ de ファッションショー La riziere (ラ・リズィエール)」(2005 年)を製作した。同じ方式で第 3 作「いい爺いライダー」(2008 年)へと、快調な撮影・製作となった。

第 2 作「田んぼ de ファッションショー」は、町民たちが水田でファッションショーを開くまでの物語。65 歳から 85 歳までの町民 50 数人が出演した。

刈り取りを終えた田んぼに設けられたタヤみのステージが、ライトの照明で浮かび上がる中、さっそうと登場した。デニム調の作業着などユニークなシルバーファッションが披露された。高橋はるみ道知事と崔監督が特別出演した。

第 3 作「いい爺いライダー」は、穂別町と鷗川町が合併してむかわ町となったのを題材にした。「山彦町」の年輩ライダー集団と「海彦町」の若手ライダー集団が合併の是非をめぐる対立、和太鼓合戦と盆踊りの場面で頂点を迎える。「ふる里って何だ」の重い問いかけをしている。

この間、地域づくり総務大臣表彰、毎日新聞自治大賞奨励賞、スポニチ文化芸術大賞グランプリなど数々の受賞をした。高校副読本で紹介され、最近フランスのテレビ局が取材にやってきた。

受賞が 20 回に達した 2009 年春、委員会はエゾヤマザクラの苗木 11 本を「映画の樹」と名付け、町民公園に記念植樹した。スタッフ約 20 人に崔監督も作業に参加、原田代表らは「目が黒いうちに花が見られたら…桜と一緒に長生きしたい」と笑顔だった。

最新作の「赤い夕陽のジュリー」は、一連の賞金に町が「最後の作品になるだろう」と奮発して 100 万円を補助、さらに北海道市町村振興協会などの補助を足し、過去最高の約 500 万円の制作費。第 1 作の撮影開始から 10 年近くの歳月が経ち、出演者 14 人が亡くなっている。

今回のストーリーは、鉱山や林業、鉄道建設などでにぎわった戦後の穂別が舞台。発電所づくりを進める「山彦村」の村長と炭鉱のボスの対立劇を軸に、保安官役の獣医の苦闘、神社まつり、山火事などを織り込んで、新たなふる里づくりに励む人たちの姿を描く。

戦後間もなく、当時の穂別村長を務めた横山正明氏をモデルにしている。横山村長は日本初のスクールバスを運行したり、村立高校を創設、さらには高齢者医療費を無

料にするなど、まさに理想郷づくりに邁進した人物。西部開拓史さながらの時代があった。

第1作から今回の第4作までをつなぎ合わせると、戦中・戦後から合併まで、穂別の歴史をたどったことになる。

2011年3月までに完成させ、7月の公開をめざす。「最後の作品になるだろう」。出演者、スタッフ、すべての町民が哀惜の思いを胸に秘めて、撮影に臨んだ。

■ 若い世代に託す

「本番、行きまーす」「よーい、スタート」。牧草畑に建てた牧舎セットに、東京から応援に駆けつけた崔監督の声が響く。

出演者だけで、総勢200人にのぼる。カウボーイハットを頭に、出演待ちの年輩男性がぽつり、ぽつりと語る。「第1作に家内が出演しているんです。先年、亡くなりましたね。今回は私が出演することになりました」。

初めてスタッフに参加したという高校生が「使い古しの軍手にするんです」と、新品の軍手を土面にこすって汚していた。裏方役の若い世代が増えてきた。



「赤い夕陽のジュリー」屋外撮影現場。祖父母の世代と孫子の世代が仲良く共演

撮影最中の2010年晩秋、斉藤さんが道教育委員会の「北海道文化賞」を受賞した。受賞理由に「宮沢賢治文学の研究」と並んで「地域の特色を題材とした映画制作に取り組んでいる」と、全作品名が列記された。

出演者、スタッフらが言う。「歌や踊りをふんだんに採り入れたミュージカル風の明るい作品に。これまで映画を一緒に作り、亡くなられた方への追悼を込めたい。最後の作品になるだろう。今後のことは、若い世代に託します」。

■ 連絡先

〒054-0211 北海道勇払郡むかわ町穂別 55-11

原田幸一方

田んぼ de ミュージカル委員会

TEL : 090-3110-7413 (斎藤 征義)